



はじめに

キリスト・教会・秘跡

一 秘跡をめぐる①

竹山 昭

の愛に直面するのは、この人の愛が語りかける動作やうつつたえる動作のなかで表されるべきのみである。この動作によって、私はこの愛のなかに入っていくことができるようになる(スキレベークス) 人と人との真の出会いはお互いに心を開いて歩み寄りことなしにはありえない。神と人との場合も同じように言えるが、ただ一つ異なる点がある。神は人間をはるかに超越するお方であり、被造物としての制約をもつ人間は自分から、自分の力で神と真に出会うことができない。神と人との交わりは、常に神ご自身が先にいつくしみ深く心を開き、会いに来ることによってのみ、はじめて可能になる、という点である。この出会いは、神の側からは「自分をあらわし、与えること(啓示)、人間の側

開いてイエズスの言葉と行為を受け入れる(イエズスを信じる)ことは必要であった。ただ、まさにイエズスが真に人となった神のひとり子であることは、そのふるまいを通常の人間が帯びる存在様式の制約のもとにおくことを意味する。からだをもつ存在として、いつも「しるし」を通してのみ、人々に神の愛、神のゆるしを表すことができた。

ちやうどイエズスが当時の人々にとって神との出会いをもたらす生けるしるしであったように…。 第二バチカン公会議が『教会憲章』の中で「教会はキリストにおけるいわば秘跡」と呼んでいるとおりである。 教会の存在と活動全体が、秘跡的性格を帯びているからこそ、その中で特定のしるしが「秘跡」とされているのも、いっそうふさわしいことが理解できる。その全体が秘跡的性格を帯びる教会の中で「イエズス・キリストの意志にもとづき、キリストとの出会いをもたらすために特別に定められて教会生活の中心をなしている特定のしるしがあり、キリスト者はこの特定のしるしを『秘跡』と呼ぶ」のである。

言うまでもなく、秘跡以外ではキリストとの出会いは実現しないというのではない。ただ、秘跡が正しく行われるとき、必ず出会うとのキリストからの保証がある、とでも言ったらよからう。 むろん、機械的に、自動的にそうなる、という意味ではない。人間にかかわるしるしであれば、常に双方に発意、応答が必要であろう。秘跡の場合にも、秘跡にあずかる人の側にふさわしい仕方での自由な応答が必要だ(信仰と愛が必要だ)というのには、ごく当然で、きわめて人間らしいことだと言えよう。 第二に、秘跡はキリストの意志によって教会に託されたので、教会は本質的に勝手に違えたり増減したりできないし、また教会からの公の委託を受けた人々がキリストの名において秘跡をとり行う、ということである。

秘跡という言葉に耳にする、多くの人は、「七つの秘跡」のことを思い描くかもしれない。それは正しいのだが第二バチカン公会議が明らかに述べたように、教会そのものが全体として「キリストにおけるいわば秘跡」と考えるのが適しい。教会が「いわば秘跡」であるのは、教会がキリストの現存と働きを世に表してもたらずものであるからだとすれば、イエズス・キリストこそ、原秘跡と呼ばれてしるべきであろう。キリスト教会といわゆる七つの「秘跡」を一つのつらなりの中で解してはじめて、私たちの秘跡生活が生きてきたものになる。

神の啓示の最終的なかたち、は人となった神のひとり子、イエズス・キリストである。こうして、神はその高みから地上に向かって呼びかけるからたちではなく、人間の生活のもっとも具体的な状況の中に人間としてそのひとり子を受肉させた。ナザレトのイエズスは、その具体的な人間存在のうちに人間に心開く神、呼びかける神、手をのばす神である。

死と復活を通して父のもとに帰ったイエズスは、それまでの制約のものにはいない。しかし、私たちはこの地上に生きるかぎりやはり根本的にしるしを通しての出会いという制約のもとにある。 復活したイエズス・キリストは世の終りまで弟子たちとともにいることを約束し(マタイ28・20)、弟子たちを介して教会に託した務めを通して人々に出会うことを約束した。 こうして、教会はその存在と活動の全体を通じてキリストとの出会いをもたらす場、出会うのしるしとなっている。

最後に、あまり注目されない点であろうが、秘跡は、これを授ける側にも受ける側にも、信仰告白と礼拝行為の最終たるものである。 イエズスは神の愛の具現であるばかりではなく、父への従順と愛に生きた。秘跡において、これを授ける教会も受ける信者も、この同じイエズス・キリストと出会い、これに一致すると信じてはじめて秘跡を授け、あずかる。そればかりではない。イエズス・キリストはその従順と愛を人類の初穂として生きた。その父への従順と愛を、教会は自らの活動において引き継ぐとする。人々をこの父への愛に今も生きるイエズス・キリストに一致させることによって人々の日々を従順と愛の奉獻に取り入れる。秘跡はその最も具体的な場である。

神の啓示の最終的なかたち、は人となった神のひとり子、イエズス・キリストである。こうして、神はその高みから地上に向かって呼びかけるからたちではなく、人間の生活のもっとも具体的な状況の中に人間としてそのひとり子を受肉させた。ナザレトのイエズスは、その具体的な人間存在のうちに人間に心開く神、呼びかける神、手をのばす神である。

当時の人々にとって、イエズスとの出会いは神との真の出会いであった。イエズスの愛のふるまい、ゆるしの言葉はそのまま、神の愛の具現、ゆるしの実現となった。むしろ、そのためには人々も心を

七つの秘跡はそれぞれ個別の特徴をもつとしても、基本的に共通した点がみられる。 第一に、根本的に、しるしとしての性格を帯びている、ということである。 その「しるし」はある種の「ものや動作」―それ自体深く人間性に根づいた、象徴的な意味をもつ―と、その動作の意味を明らかにし、キリストのわざと結びつけているある「言葉」とからなっている。 第二に、しるしは、本當にしるしとして成り立つときにはいつもそうだが、ある現実をもたらず。人間同志の交わりにおいても、たとえば心からの挨拶は双方の心の思いを

表すだけでなく、そうすることで心の交流を実現する。秘跡の場合は、復活して今なお救いの働きを続けるキリストとの出会いが表され、実現する。 言うまでもなく、秘跡以外ではキリストとの出会いは実現しないというのではない。ただ、秘跡が正しく行われるとき、必ず出会うとのキリストからの保証がある、とでも言ったらよからう。 むろん、機械的に、自動的にそうなる、という意味ではない。人間にかかわるしるしであれば、常に双方に発意、応答が必要であろう。秘跡の場合にも、秘跡にあずかる人の側にふさわしい仕方での自由な応答が必要だ(信仰と愛が必要だ)というのには、ごく当然で、きわめて人間らしいことだと言えよう。 第二に、秘跡はキリストの意志によって教会に託されたので、教会は本質的に勝手に違えたり増減したりできないし、また教会からの公の委託を受けた人々がキリストの名において秘跡をとり行う、ということである。

原秘跡 イエズス

「私が、私に対するある人

「私が、私に対するある人

「私が、私に対するある人

「私が、私に対するある人

「私が、私に対するある人